

五十槻園信濃檀會日記

天明六（1786年）に、伊勢の御師の荒木田久老が善光寺周辺の檀家廻りをした時の日記。長野県立図書館蔵。正式名なく「五十槻園旅日記」「荒木田久老信濃下向日記」などともいわれる。

五月二十六日の記事の一部に、

近日為登戸隠山而豫作設歌

みすゝかる信濃国岩はしる水内縣にありたゝす戸隠の山神の山山からか諾も神さひ神からか諾もたふとき梓弓腹墅ゆ見れは五百重山い立へなりて遙くに不二の山みゆ間近に朝間山みゆ名くはしいつなの山もこの山のおなしつるねそぬは玉の黒姫山もさし並の隣の山そ群山もよりてつかふる戸隠の神の御稜威をかしこみてぬかつき奉りをろかみ奉る

六月の記事に、

六月朔日晴

朝三福寺住僧見舞夫方山田中村七兵衛ニ止宿役人盃事帳面早速相濟昼飯牡丹餅夕蕎麦切風味宜敷皆々大食故さとの名にかよひたるあし曳の山田中にしいほりすけふは

下小鍋村ニ至松本市郎左衛門止宿昼飯牡丹餅役人檀家不残盃夕飯蕎麦切役人皆々酩酊やかましくて及迷惑候事至小鍋邑明日為経飛岩而豫作歌

ものゝふの手かみおしねり立むかひすゝはな川を河のほりいやのほりきて川隈の小鍋にいたり入山に入立道はか

しこしと人はいへとも故郷に帰りて後のしぬひ艸かたり
くさにとその道をけふそへて行川中に并立いはほ岩の上
をとひつゝわたり河のびにかさなる岩ほいはのしたくき
つゝすきて岩ねとり艸とりのほり岩はなゆはるかにみれ
は藍のこと青みたる淵雪のことしろき水泡を渦巻てたき
ち落水みるめもよくるゝか如く心もよ消るかことくこと
のみにあらぬこのみちうつしみの世の人みなないけるき
はみへかてのみちは八十隈にありとは聞と何をかもおそ
れみおもはんかくはかりかしこき道もしかはかりあやふ
き道も里ひとはやすくそかよふ道ゆきもしらぬわれすら
むらきもの心ふりおこしゆけは行ものを

二日 雨降

四ツ時飛岩を経て岩戸村に至るけにおそろしき道なり岩
戸村檀家盃事帳面相濟永井二郎兵衛方^ニテ昼飯出^ス茶めし
甚たよろし夫方景山^ニ至り小林伊左衛門方止宿

みな月のあつき盛りを夏としもしらてや過る景山の里

三日 曇夜^ニ入大雨寒し

景山方日照田に至の道暫原あり杜若多し原を過て日照田
へ下る道左右谷深く^ニ迂り道^ニテ甚た難所也

塚田小右衛門方止宿

日照田はことにし有けり雲まよひ雨ふりみたる山の邊の
里

聞なれぬ谷の水音猿の聲さわく枕にいこそねられね
山幾重立へなりきて白雲に望はたえぬふるさとの空

昼飯牡丹餅其後帳面盃事夕飯蕎麦切空服難堪

當家の鶏平沢村方来ル初メ平沢村^ニテ卵を生此家に来て後
四年去年方時を鳴尾も段々長く成雄鶏に變すと云り

四日 雨

四ツ時日照田を發上楡本庄右衛門へ立寄蕎麦切風味よろ
し

夫方横道庄屋戸隠領なり市左衛門止宿

五日 曇

四ツ時發上野村栗田大膳へ見舞酒吸物小川六右衛門方へ見

舞酒吸もの小川六右衛門は提織部檀家方爰に來候由申夫方

西七郎左衛門止宿落着牡丹餅吸もの夕飯うんとん也

西氏は年頃したしくし給ふにことし天明六年みな月の五日彼家にやとりけるにむかし祖父君久樹神主のやとり給へることらあるしのいへはしほてといふものあつものにして出せ

契ある人の心のおくふかきみ山のやとり世々にかはらし

あやしき鳥の音よるは慈悲心といふよしいふに

聞なれすめなれぬ艸木鳥のねにとこよ国かとあやしまれける

六日 曇

戸隠山登山中院宿坊徳善院着落着牡丹餅院主出合夫方本坊へ着

之段届ル彼方方案内有之後ニ判左衛門麻上下ニ而一万度并音

物持参立帰て後院主案内にて本坊へ行院代出合院下此節病

氣故乍残念敢出合不被申候との事吸物かたくり岩たけ重物竹の子盃薯蕷

取肴五種蕎麦切院代玄関送り徳善院へ帰り止宿 本坊方

使者小林文内麻上下白銀壺枚祝儀持参例年之御初穂百足持参也

戸隠の山にいほりし朝戸出の真袖にはらふあまのしらくも

何しかも恋つゝありけんほとゝきす鳴聲きけは故郷おもほゆ

都には氷室奉るみな月もまた雪きえぬ戸かくしの山

傳たへ聞葉はまねとしら雲のたなひく上にわれは來にけり

七日 曇 綿入はた着にて猶寒し

徳善院朝飯甚馳走奥院へ参詣九頭龍岩屋拝し夫方直ニ上

野へ下山西七郎左衛門宅又々止宿昼飯強飯夕そは切

上墅に着けるに雨しきりにふれり

名くはし飯繩高ねに雲あつゝ上墅原のにあめふりしきる

四ッ時上墅を発庄屋市郎右衛門へ立寄酒吸物祝儀式十疋

上墅方犬飼村へ行道杜若いと多く咲たり(けつ)

見る人もなき山中にかきつはた何かもとな咲てなまめ
く

夫方犬飼村へ行常田九郎右衛門へ着直隣家常田七左衛門
門へ振舞にニ行九郎右衛門ニ止宿檀家盃事帳面相済夕
飯茶めし甚よろし吸もの酒

十九日 朝雨四ッ時方晴

犬飼村發広瀬村ニ至 (以下略)

註

「信州デジくら」に画像がある。23、24コマ目、

27、28、29、30コマ目。諸本あつて「荒木田久

老信濃下向日記」と題して「長野」第35号1971
年一月に小林計一郎氏の復刻。「五十槻園旅日

記」として『新編信濃資料叢書』第十巻にも。い

ずれが原本に近いか不明だが、時にある記事が別
の日付になっていて混同がある。また久老の「槻
の落葉 信濃下向の歌」にも一部が文言を変えて
記載され、別種の記載もある。「近日為登戸隱山
豫作設歌」には反歌二首が添えられている。

なお「槻の落葉 信濃下向の歌」は「近世万葉調
短歌集成第一巻」(DOY 10.11501/1939739)に所
載。